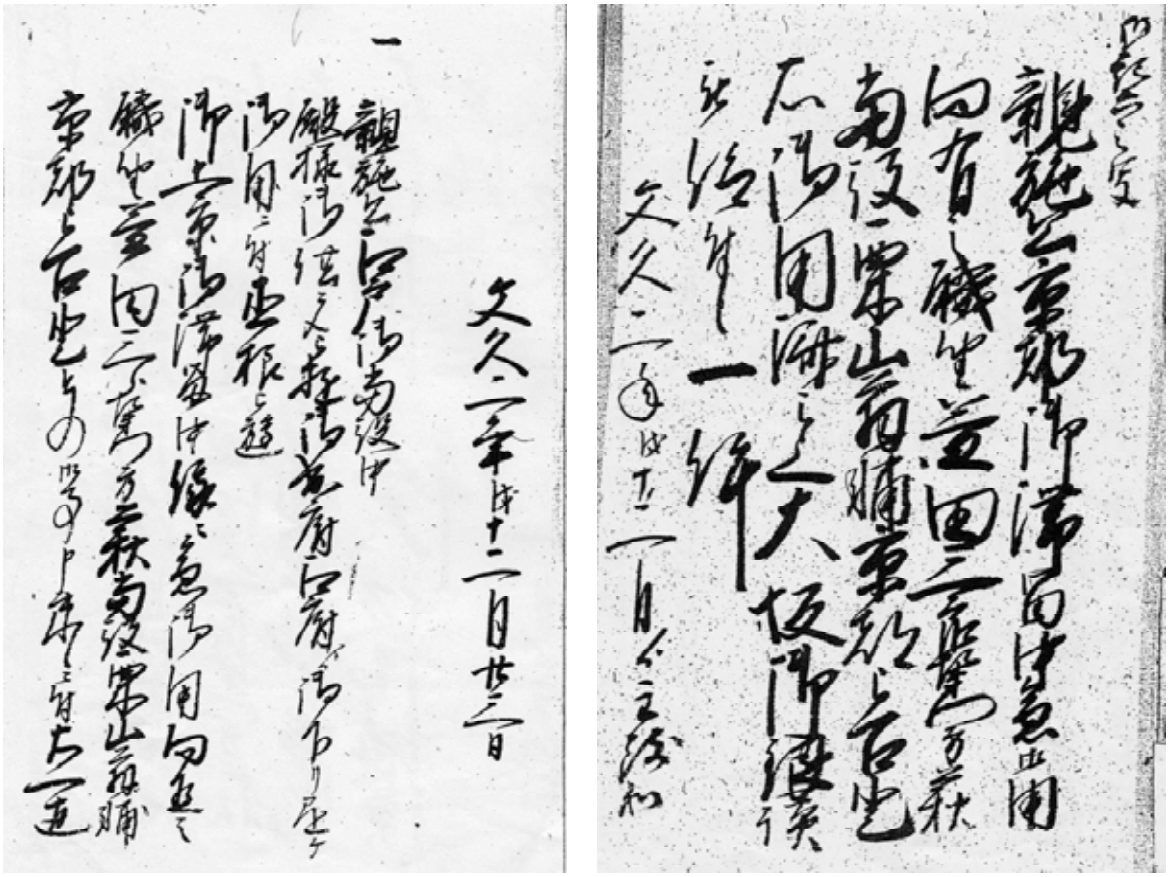

御記（録）六之写

親施公京都御滞留中急御用

向有之職座益田三郎左衛門方萩

当役栗山翁輔京都被召登

右御用済之上大阪御銀談

被仰付候一件

文久二年戌十二月より　主致和（むねかず）

【注】別史料に「三郎左衛門致和」なる文字あり。幕末時職座に居た益田三郎左衛門ナリヤ。益田邦衛致恭は次か。

文久二年戌十二月廿三日

一親施公江戸御当役中

殿様御供ニテ被遊御出府江府より御下リ懸ケ

御用ニ付直様被遊

御上京御滞留中俄ニ急御用向有之

職座益田三郎左衛門方萩当役栗山翁輔

京都被召登との御事申来候ニ付右一達

并ニ御警衛人数之内同道ニテ左之面々

今朝未明萩御屋敷出足之事

職座　益田三郎左衛門方
御警衛　益田助十郎方
萩当役　栗山　翁輔
翁輔御付冷飯　栗山　観之助（注）
御警衛□□□□カ也　山崎　拾郎右衛門

（注）栗山観之助は翁輔の長男包達のことである

三郎左衛門方筆者御付兼　泰
中村□一
三郎左衛門方付後付　市郎左衛門
三郎左衛門方道具持　須佐地与ノ【注】与＝組　彦助
翁輔右同　瀬尻与ノ　平右衛門
助十郎方右同　宇谷与ノ　嘉左衛門
拾郎右衛門右同　同ノ　京右衛門

右上京人数白九ツ時（十二時）佐々並土山久七

宅ニテ昼食相認同夜暮過山口三文字屋虎吉宅ニテ着止宿之事

一

十二月廿四日　天気

今朝六ツ時（六時）山口出足ニテ宮市藤村屋孫七宅ニテ昼食相認白八ツ半時（十五時）富海（とのみ）入本屋磯七宅着せしめ候左候而同所より大坂迄渡海船一艘船頭淀屋常助（水夫のこと）舸子弐人乗ニテ運賃金五両船旅籠（ふなはたご）料壱人ニ付日別百六拾文蒲団代壱枚ニ付四百文宛ニシテ仮受（ツケタリ）借同夜五ツ時（二十時）乗船之事

付リ　本文船仮受トシテ後附市郎左衛門

今朝山口より先越ニテ渡海船二艘令雇（せしめ）入候処折柄徳山より急ニ拾七艘之御用船申参リ一艘相断候ニ付本文之通一艘へ一同ニ乗組候事

十二月廿五日　天気昼後より東風ニ成

一

今朝六ツ時（六時）富海（とのみ）出船白七ツ半時（五時）笠戸へ着船之事

十二月廿六日　東風ニテ少々雨天

一

今日も笠戸ニテ滞船之事

同　廿七日　東風
白七ツ時より少シ止

一　白八ツ半時笠戸出帆七ツ半時過室積へ着
船同夜泊船之事

同　廿八日　天気北東風

一　今朝六ツ時室積出帆四ツ時室津繋船
白九ツ半時室津出帆薄暮沖ノ家室
泊船之事

同　廿九日　天気東風

一　今日家室ニテ滞船之事

文久三亥　正月元旦　天気北東風

一　今朝正六ツ時家室出帆四ツ時豫州
津和ニテ潮懸リ白八ツ半時同所出帆暮
六ツ半時過相嶋（安居島）ニテ泊船之事

同　二日　北風天気

一　今朝六ツ半時相嶋出帆白九ツ時御手洗
繋船七ツ時同所出帆夜八ツ半時野牛（のうじ＝網子、現在の能地）
ニテ潮懸リ之事

同　三日　天気北東風昼後より西風ニ成

【注】安居島は風待港として良い。商船の往来活発にして遊女七～八〇人居たという。

一　今朝正六ツ時野牛出帆四ツ時備後尾
ノ道着船後附市郎左衛門揚陸仕らせ同所
本陣笠岡屋并ニ馬借へ差越京都
殿様御発駕之御様子聞合せ仕らせ候処
折柄御國より登飛脚金之助馬借ニ居
合せ様子相尋候処
若殿様ニハ去月廿八日京都御着駕
殿様京都御発駕之処ハ未不相分由申
事ニ候尚本陣馬借ニも未御宿割等も
御触無之由ニ付即刻同所出帆暮過キ
日比泊船之事

【注】●馬借＝中近世馬を利用して運送に従事した労働者
●登飛脚＝上方へ行く飛脚。当時、上り商ひの言葉がある。

正月四日　平波曇天

一　暁八ツ時日比出帆牛窓前ニテ潮懸リ白
四ツ半時同所出帆七ツ半時播州室西
ノ泊リ繋船之事

同　五日　天気平波西風

一　今暁八ツ時（二時）室出帆練部（注）沖ニテ潮懸リ白（ヒル）九ツ時（十二時）明石着船潮懸リ即刻同所出帆白（ヒル）八ツ半時（十五時）兵庫港へ着泊船之事

同　六日　天気西風

一　今朝六ツ時（六時）兵庫出帆白（ヒル）八ツ半時（十五時）大坂安治川口入津夫より土佐堀常安橋北詰船宿山城屋喜平治方へ揚リ止宿之事

付リ　中間之内両三人船荷物番トシテ泊船之事

【注】練部→綾部の誤りか

一　淀船三拾石一艘運賃七貫弐百文ニテ喜平治心配を以雇切せしめ候（免）尤今日ハ船詰ニ而乗替不相捌ニ付明朝五ツ時（八時）之出船ニ相定置候事

正月七日　天気

一　今朝富海（とのみ）船より淀船へ荷物積替へ仕らせ五ツ時（八時）乗船直様出帆暮過伏見着鈴木善兵衛方ニテ止宿之事

付リ　着岸之上船荷物類不残善兵衛方へ運び取せしめ候事

一　明日京都迄荷送人馬本馬壱疋駕籠夫三人平夫三人いづ連も朝五ツ時（八時）伏見出立ニ善兵衛方ヨリ触出置候事

同　八日　晴天

一　今朝五ツ半時（九時）伏見出足白（ヒル）九ツ半時（十三時）京都三条上ル瓦町御旅館へ着せしめ候事

正月九日　天気

一　此度上京人数侍分御旅館於御客間ニ御目見被仰付候事

付リ　御熨斗等之儀ハ公儀御停止内之儀ニ付一向無之候事

正月十日　天気
同　十一日　天気
同　十二日　同
同　十三日　〃
同　十四日　寒天
同　十五日　天気昼後ヨリ少し雪天
同　十六日　天気

同　十七日　〃
同　十八日　雨天
同　十九日　天気
同　廿日　天気

一　此度
殿様参議宰相ニ被為任候ニ付今晩
御固屋ニ於ゐて御祝客衆へ御酒被差出
御内輪御供中へも御酒被下
旦那様ニも被遊御出座候事

正月廿一日　天気
同　廿二日　雨天

【注】文久三年一月敬親参内、参議ヲ拝任ス

一　今日
殿様京都被遊　御発駕候ニ付
旦那様ニも御供ニテ白七ツ半時御機嫌能
被遊
御発駕候事

同　廿三日　天気

一　益田三郎左衛門方栗山翁輔儀ハ御用有之
引残リ滞京被仰付尚下り懸ケ大坂
御銀談被仰付との御事ニ付今日より同所
近江屋弥三郎宅仮受夜具ハ御貸揚之分
持参ニテ旅籠料壱人日別三百文宛ニテ
左之人数滞留之事

益田三郎左衛門方
栗　山　翁　輔
翁輔御付冷飯
栗　山　観　之　助
三郎左衛門方筆者御付
中　村　□泰一
三郎左衛門方付後付
同人道具持市郎左衛門
須佐地与ノ彦助
翁輔右同
瀬尻与ノ平右衛門

正月廿四日　天気
同　廿五日　天気少々雨天
同　廿六日　雨天
同　廿七日　天気

一　今朝五ツ時（八時）京都出足白九ツ時（ヒル十二時）伏見
鈴木善兵衛宅着今夜止宿之事
付リ（ツケタリ）今日京都より伏見迄荷送人馬
之儀ハ昨日公儀日雇頭大坂ヤ
伊右衛門へ相頼本馬壱疋駕籠
六人平夫壱人触出せしめ置
候事

一　伏見ヨリ大坂迄淀船三拾石壱艘運賃
六貫五百文ニテ鈴木善兵衛心配ヲ以（借）仮
受之事

同　廿八日　天気

一　今朝五ツ時（八時）伏見乗船白七ツ時（ヒル十六時）大坂常
安橋御波戸場へ着船左候（さそうろうて）而同所南詰止
坂田屋小七宅（借）仮受滞留せしめ候事

正月廿九日　雨天
二月朔日　天気
同　二日　同
同　三日　同

一　於大坂泉屋六郎右衛門油屋彦三郎両家
へ御銀談被仰付候ニ付而ハ先達而
旦那様御滞留中六郎右衛門彦三郎両人へ
御目見被仰付候節御勝手方之儀御直ニ
御意委細ハ三郎左衛門翁輔近々当地罷
越早速可及示談儀ニ候へとも旅宿坂田屋方
相宿多人数混雑故是迄ハ見合居候処
今日宿ヨリ使ヲ以及通達呉候様相頼尚
筆者中村泰一ヨリ泉屋ニ而ハ十兵衛油屋
ニ而ハ小太郎へ手紙差越持登（もちのぼせ）之粕漬
鮑一桶宛差越尚差向キ用談有之候
間十兵衛小太郎早速旅宿罷越候様頼
越候処折柄両人ともニ留守ニ付明日可
罷出返答使之者取帰候事

以手紙得御意候此度益田
三郎左衛門栗山翁輔用向有
之先日致上京候処此内御当地
迄下向仕御当家へ御相談事
御座候ニ付致滞留候就而ハ至而
麁薄（そはく）之儀恥入候品ニ御座候へとも
持登（もちのぼせ）之領産粕漬鮑一桶致
御持せ候間乍御無礼彦三郎殿六郎右衛門殿と相調候事
御通達御頼仕候尚差懸リ御面
談相願度由ニ候間乍御苦労鳥渡（チョット）

貴様へ御来儀致御頼候右御与相（ヨリアイ）（乞相か）
旁得御意度早々如斯御座候　已上

二月二日　中村□泰一

泉屋
十兵衛様
油屋
小太郎様

一　両家本人手代ニテも来リ候ハヽ銀談之儀ハ
百貫目之利安新借及示談都合之趣
意演説書ニテ相渡シ可申段申合せ左
之通厚手紙へ相調半紙包ニシテ上（うえした）エ下タ
打懸ケ演説覚と相調候事

演説覚

【注】演説＝自己の意見や希望、訴、願等を上局に対し陳述する為の覚書き。

旦那所帯向難渋之段ハ追々
御承知之儀ニ御座候既ニ先年
も旅用金及御相談懸候相州
出役事其後地江戸両役引続
殊ニ近年ハ旅役勝ニテ況時勢
不穏趣も有之度々手当之
人数も被相増不容易費用
相増勝手方不相捌筋も候ヘハ
役筋之処辞退をも被申出候ヘ共
達而之被蒙主命候而（て）ハ致方も
無之差向時勢之周旋被致心
配候ヘとも於内実ハ上下之苦心
不容易此段ハ御賢察可被下候此般
京都滞留ともハ別而公卿方へ日々
之参会諸藩之附相（つきあい）等夜白（よるひる）
不限義ニ而勿論雑費之儀ハ不
及申甚太荘（はなはだたいそう）之儀ニ候ヘハ何卒御周
旋一件之太義相調且々（かつかつ）帰国之
期を相願居候処漸先日帰国之
御暇（いとま）相済候趣ニ相聞ヘ候内又々
関白殿下より御内慮も有之主人
身上之儀ハ御引留ニテ諸藩之周
旋被致心配候様との義も有之候
処於國許も政治向改正之
急務も御座候ニ付而ハ右不得止（やむをえざる）事
趣を以本藩より達而御願出相成
漸（ようやく）先日被致帰国候次第ニ候ヘハ此餘
何時上京之

厳命も可有之哉も難斗左
候へハ右之手当も不相叶儀
殊更当時之振相ニテハ長薩
土三藩之儀ハ諸国ニ先立周
旋之御大任御服膺之訳ニテ殊ニ
当時（注）旦那役向ニ付而ハ本藩
之目途ニも被相立候義故差
向内輪之処士道之振起肝
要之儀ニ付帰国之上ハ於領分ニ
練兵場所替手広ニ開立日々
調練被申付度内意有之且

【注】当時＝現在、今

又不一通大荘之雑費事ニ
候へ共興（廃）敗最要之時勢ニ候へハ
勿論片時も調練難欠儀ニ付
此段も早速致（詮）誼議度旁内輪
ニおぬても上下之当惑不大形
既ニ先日旦那通行之節も御両
家へ粗御（注）頼被申懸候由就而
ハ小生両人御当地相滞前段
及御示談候様被申付儀ニ御座候間
何分入（注）割与得御勘弁被成下年
来之御固相を以主人之存意相立
当家之瑕瑾ニ不相成様本藩
へ対シ且々被遂御奉公候様御両
家之御配慮を以勝手方相委
続之御吟味被致御頼候い細
御銀談筋之儀ハ御面談ニテ申

【注】頼頼＝（衍字）二字のうち一字は無くてもよい字

【注】与得＝得与→とくと

伸候義ニ候へハ不能謹書候　已上

亥ノ二月

二月四日　天気

一

今日泉屋十兵衛泉屋九兵衛旅宿罷
越候ニ付銀談之趣意申聞せ銀百貫
目之利安借及示談演説書十兵衛
へ相渡候処両家与得申合返答可仕
由申述罷帰候事

付リ（つけたり）　十兵衛九兵衛へ取肴三種
吸物ニテ酒差出候事

二月五日　天気

一　泉屋六郎右衛門義旅宿罷越候ニ付及
銀談取肴三種吸物ニテ酒差出候事

【注】取肴＝各自が分けて取るように
折敷などに盛って出す酒の肴

同　六日　天気

一　今日泉屋油屋両家へ見返トシテ左之通
同道ニテ罷越候然ル処彦三郎儀当節
気分（きぶんあい）相之由ニテ相対不相調申置ニテ引
取せしめ六郎右衛門宅罷越候処折柄六郎右衛門
他出之由ニテ嫡子榮太郎へ相対之内六郎右衛門
罷帰リ茶酒飯等差出候事

付リ　着服之儀ハ一向無支度之段
昨日六郎右衛門迄挨拶置旅
装懸割羽織小袴ニテ罷越候
道具之儀も態（わざ）と持せ不申勿論
着服綿服ニテ之事

益田三郎左衛門方
栗山翁輔

翁輔御付
栗山　観之助
三郎左衛門方右同
中村□泰一
三郎左衛門方草（ぞうり）取
彦助
翁輔草り取
平右衛門

二月七日　天気

二月八日　雨天

一　今朝泉屋へ挨拶トシテ筆者中村泰一
差越候事

一　油屋小太郎泉屋九兵衛入来此内及
示談候御新借之儀尚又近年御不足御道
付之儀申談候事

付リ　本文両人へ取肴三種吸
物ニテ酒差出候事

一　小太郎九兵衛義此度百貫目利安之御
新借甚難渋申出就而ハ過ル未申戌三
年之御不足銀真之御暫借（しばらくがり）之儀ニテ甚問（つかえ）
筋御座候ニ付何卒右へ対シ御道付之
御仕法有之候ハヽと申出候ニ付小太郎九兵衛

（注）

罷帰候後左之通仕法立相調又々可及
相談申合候事

【注】未申戌＝何故か「酉」が抜けている

覚

一　銀百五拾七貫四百三拾五匁七分五厘七毛
　此利拾四貫三百弐拾六匁六分五厘也
〆百七拾壱貫七百六拾弐匁四分七毛
　但　未申戌三ヶ年不足
　内
　正銀三拾弐貫目
　　但生蝋（きろう）百丸丸別四両
　　かへと見テ
　拾四貫三百弐拾六匁六分五厘也
　　但利納
　拾七貫六百七拾三匁三分五厘也
　　但且納　（注）
残り元百三拾九貫七百六拾弐匁四分七毛
　此利拾弐貫七百拾八匁三分七厘八毛
〆百五拾弐貫四百八拾目七分八厘五毛
　内
　三拾弐貫目　子
　　但利且納
残り元百弐拾貫四百八拾目七分八厘五毛
　此利拾貫九百六拾四匁三分九厘四毛
〆百三拾壱貫四百四拾五匁壱分七厘九毛
　内
　三拾弐貫目　丑
　　但利且納
残り元九拾九貫四百四拾五匁壱分七厘九毛
　此利九貫四拾九匁五分壱厘壱毛
〆百八貫四百九拾四匁六分九厘九毛
　内
　三拾弐貫目　寅
　　但利且納
残り元七拾六貫四百九拾四匁六分九厘也

【注】利且納（りかつのう）＝「元利且納」の略。「利」は利子、「且」は割の意。元利の割賦返済の事。

此利六貫九百六拾壱匁壱厘七毛
〆八拾三貫四百五拾五匁七分七毛
内
三拾弐貫目　卯
但利且納
残り元五拾壱貫四百五拾五匁七分七毛
此利四貫六百八拾弐匁四分六厘九毛
〆五拾六貫百三拾八匁壱分七厘六毛
内
三拾弐貫目也　辰
但利且納
弐拾四貫百三拾八匁壱分七厘六毛
此利弐貫百九拾六匁五分七厘四毛
〆弐拾六貫三百三拾四匁七分五厘也
内
三拾弐貫目　巳
但利且納引
残り五貫六百六拾五匁弐分五厘也
但返上之分

右之通御領産之生蝋年ニ百丸宛仕登せ之都合を以利且納右代銀ニテ立引之算用ニシテ相調見候事
覚
一銀弐百三拾三貫百三拾九匁也
但去霜十二月御売授千五百石代
一七拾七貫七百拾三匁也
但右同断増五百石代
一三拾貫目位
但諸借去戌ノ利且納
其外大坂御払銀辻
〆三百四拾貫八百三拾弐匁也
内
弐百八貫目也
但半紙千六百丸当春
登之丸別百三拾目也
七拾七貫七百拾三匁也
但増五百石代現金登

【注】辻＝合計

之分
右之通当春之立引相調
見候此分ハ当年御半紙限
直段(ねだん)取組之上御勘定相立
不足銀之義ハ差登候分

二月九日　曇天

一今朝泉屋六郎右衛門義此内見通トシテ
罷越候礼挨拶トシテ旅宿罷越候尤昨
日相調置候書面を以九兵衛
へ可及示談覚悟ニテ九兵衛儀
明朝差越呉候様六郎右衛門へ咄(はなし)
入置候事

一昼後九兵衛ヨリ中村□泰一迄手紙差越
明日ハ無拠差問(さしつかえ)ニ付明後十一日可罷
越段申越候事

一富海(とのみ)入本屋伝次郎船一昨日着船之
由ニテ旅宿へ罷越候処大坂より富海(とのみ)迄
船運賃金五両壱歩ニテ受合相懸ヶ留
置候事

二月十日　天気
同　十一日　天気

一今朝泉屋九兵衛罷越候ニ付相調置候
書面相渡尚(委)い細之趣同人へ及示談
候処両家申合見可申由申事ニ付
諸事心配相頼候今日も取肴三種ニテ
酒差出候事

二月十二日　天気

二月十三日　曇天

一今朝泉屋九兵衛参り此内示談之趣両
家追々申合相成候へ共何分当時金
銀至而(いたって)払底ニテ両家ニも差問居(さしつかえ)候へ共
兼而(かねての)之
御当家様ニ御座候へハ勿論一向ニ御断ハ
難申上ニ付此度御取帰り金五百両御用
立可申候夫とも利銀之儀ハ当時大坂
高利ニ付御用金之内へハいづれ脇方
口入も有之儀ニ候へハ利安と申儀ハ甚
不相捌猶又増御蔵納米代七拾貫
目餘之儀ハ勿論別段御銀被差上候而

相済候訳相ニテ両家一向ニ引当も不仕
儀ニ候へハ此分ハ現金被差登被下候様ニ
との儀ニ付両人申合見候処両家之処も
当時大坂之模様ニテハ利安金之相談ハ
餘程難渋之様子ニ候得とも殊ニ元銀
も五百両位之借用ニテハ強而御借用之
廉も立不申儀ニ付御内輪ニ相談振随
分省略之詮議を以千両丈ケ借用相調
候ハゝ利銀之儀も三朱ト申ハ至而御難題
ニ相聞へ候へハ此上ハ御内輪是又致省略
五朱利ニ御申合被下候様此上ハ御内輪ニテ
手段無之候間是非夫丈ケニハ相調候様
示談之儀九兵衛へ相頼引取せしめ候事

二月十四日　天気

一
今昼後九兵衛来り示談之趣ハ昨日両
家へ相談之趣申合見候処実ハ此内
已来御咄仕候様大坂金詰之義ニ付右
御銀談相調候上ハ御上納増石代へ御立
引ニ相成事ニ候へハ爰元御増石代両家より
出銀之筋ニ相成是等ハ勿論御國許より
御仕登せの御約定前ニテ引当不仕御銀
俄ニ出銀之筋ニテ大問ニ御座候乍忝此
度之御入割ニテハ御銀談不相調而ハ不相
済訳柄ニ候へハ何卒此内御仕法楯之生
蝋百丸宛壱番船ニテ御積登被下且昨
年之御勘定不足拾六貫目餘之処丈
ケハ早々御登被下候ハゝ何卒彼是之繰り
合せを以此度之御用弁仕度段申候ニ付
申合併いつれ登方之生蝋ニ候へハ相調居
候ハゝ早々積廻候而可然事ニ候へとも右生蝋
登方之儀ハ爰元ニテ之御約定ニテ国方
出足之節申合せ置不申事ニ候へハ其内
捌方いたし候哉も難斗甚半途之筋
相答候処九兵衛申方ニ御尤之儀ニ御座候
併御貯無之節ハ致方無之候へとも何卒
此段御國元へ被仰越被下候様ニと達而
相願候儀ニ付然らハ当所より四日切之
町飛脚も有之儀ニ候へハ成ル不成ハ御受
相不相成候へとも早速申越見可申いつれ
二番船ニハ多少ニ不依積登シ可申段

申入候処い細承知仕候乍去（さりながら）御積登之
五拾丸ヨリ内ニテハ爰元ニテ之売捌キ
いづれ雑費相懸候儀ニ付損亡ニ相成
候間何卒可相成ハ五拾丸已上御登せ
相成候様申事ニ付早速御國可申越通（もうしこしとおすべく）
及返答候尚九兵衛より利安之義難渋之
内咄（はなし）仕候ニ付此義ハ是非御心配被下候様
其段相調不申節ハ此度之御示談御破
談之外致方無之段申入置候彼是長談
ニ相成候故取肴弐三種ニテ酒差出夜
ニ入引取せしめ候事

二月十五日　曇天

一　今日益田丹下方へ両人連名ニテ内御用
状相認（あいしたため）右生蝋壱番船ニテ積廻之儀申
越候尤御内用ニテ引足不申候ハゝ脇板
場出来相（できあいの）之蝋ニテも御貸借り揚ニテ御廻シ
方相成候様書状相認四日切之早飛
脚堂嶋車源より書状送リ賃壱歩ニテ
仕出候様子ニ付賃銭相添へ宿亭主小
七へ相頼置候事

一　今日油屋彦三郎泉屋九兵衛同道ニテ
旅宿見廻トシテ罷越候ニ付銀談之挨拶